

初期症状が重要な副作用について No. 1

副作用とは

薬が持っているいくつかの作用の中で、あなたの病気の治療には必要でない作用や有害な反応のことを「副作用」と呼びます。副作用の出方は、薬の種類や人それぞれの体質などによって異なります。

副作用の中には、すぐに対処が必要なものと、治療のために許容されるものがありますので、薬を使い始めて「なにか普段と違う、変だな」と感じたら、主治医に伝えていただくことが大切です。

そこで、まれにしか起こらないが、初期症状のうちに対処が必要な副作用について、代表的なものをご紹介しますと思います。

★ 間質性肺炎（かんしつせいはいえん：Interstitial pneumonia：IP）

はいほう
肺は肺胞と呼ばれる小さな袋がブドウの房のように集まって出来ている臓器です。吸い込んだ空気中の酸素は、肺胞の壁から血液中に取り込まれます。間質性肺炎は、この肺胞の壁や周辺に炎症が起こり、血液中に酸素が取り込まれにくくなる病気です。



症 状

からせき
息切れ（呼吸困難）、空咳（痰のない咳）、発熱などが急にあらわれたり、持続したりします。



何らかの薬を使用していて、このような症状がみられた場合は、
放置せず、必ず主治医に伝えてください！！

原 因

薬によって引き起こされる場合があります。

代表的なものとしては、抗がん剤（内服剤、点滴剤）、抗リウマチ薬、インターフェロン製剤、漢方薬（小柴胡湯など）、解熱消炎鎮痛薬、抗生物質などがあります。

総合感冒薬（かぜ薬）のような市販の薬でもみられることもあります。

相互作用（薬の飲み合わせ）で起こりやすくなることもありますので、服用中の薬のある方は必ず主治医に伝えておいてください。

★ スティーブンス・ジョンソン症候群 (Stevens-Johnson syndrome : SJS) (=皮膚粘膜眼症候群)

症 状

高熱(38℃以上)を伴って、発疹・発赤、やけどのような水ぶくれなどの激しい症状が、比較的短期間に全身の皮膚・口・目の粘膜にあらわれます。



目の変化は、皮膚などの粘膜の変化とほぼ同時に、あるいは皮膚の変化より半日もしくは1日程度、先にあらわれ、両目に急性結膜炎(結膜が炎症を起こし、充血・目やに・涙・かゆみ・はれなどが起こる病態)を生じることが知られています。



何らかの薬を使用していて、このような症状がみられた場合は、
放置せず、必ず主治医に伝えてください!!

原 因

その多くは薬と考えられています。

発生頻度は、人口100万人当たり年間1~6人と報告されており、原因と考えられる薬は、抗生物質、解熱消炎鎮痛薬、抗てんかん薬など広範囲にわたります。

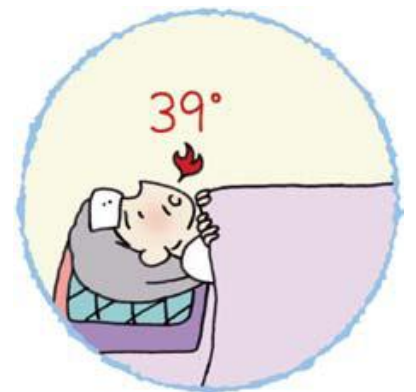
総合感冒薬(かぜ薬)のような市販の薬でもみられることもあります。

薬の使用後2週間以内に発症することが多く、数日以内あるいは1ヶ月以上経ってから起こることもあります。

★ 中毒性表皮壊死症 (ちゅうどくせい ひょうひ えししょう Toxic epidermal necrolysis : TEN) (=ライエル症候群 Lyell's syndrome)

症 状

全身が広範囲にわたり赤くなり、その10%以上にやけどのような水ぶくれ、皮膚のはがれ、ただれなどが認められ、
高熱(38℃以上)、皮膚や口にできるぶつぶつ、目が赤くなるなどの症状を伴う重症の皮膚障害です。



スティーブンス・ジョンソン症候群と中毒性表皮壊死症は一連の病態と考えられ、中毒性表皮壊死症の症例の多くがスティーブンス・ジョンソン症候群の進展型と考えられています。



何らかの薬を使用していて、このような症状がみられた場合は、
放置せず、必ず主治医に伝えてください!!

原 因

その多くは薬と考えられています。

発生頻度は、人口100万人当たり年間0.4~1.2人と報告されており、原因と考えられる薬および発症までの期間はスティーブンス・ジョンソン症候群と同様です。